

鳥羽離宮跡発掘調査概報

平成2年度

京都市文化観光局

序

京都市は、古来豊かな自然と人に恵まれ、平安京建都以来、日本文化のふるさととして多くの人々に親しまれています。

しかし、今日、歴史・文化遺産から醸しだされる古都の環境には誠に厳しいものがありますが、「保存と開発の調和のとれた活力あるまちづくり」、「国際性豊かな教育・文化のまちづくり」等を進めなければならないと考えています。

また、「京都市健康都市構想」や「新京都市基本計画」を策定し、建都以来の歴史・文化遺産の上に立った新たな文化を創造し、発展させ、京都のまちを、環境を、私たちの子孫に引き継いでいく重要な使命があると考えています。

この報告書は、京都市が平成2年度に文化庁国庫補助を得て実施いたしました京都市内埋蔵文化財の調査報告であります。本書が少しでも京都の歴史を知るための資料として学術研究はもとより、文化財の保護・普及のため広く一般の方々に活用されることを望んでおります。

終わりに、発掘調査に御協力いただいた市民の皆様をはじめとし、この事業を進めるにあたり御指導・助言をいただいた文化庁記念物課・京都府文化財保護課並びに関係各位にお礼を申し上げるとともに、発掘調査を担当していただいた財団法人京都市埋蔵文化財研究所に謝意を表します。

平成3年3月

京都市文化観光局

例 言

- 1、本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した、文化庁国庫補助による平成2年度の概要報告である。
- 2、調査地は、京都市伏見区竹田内畑町56-4、62-1、63-2に所在する。
- 3、発掘調査及び本書の執筆は、(財)京都市埋蔵文化財研究所の磯部 勝が資料整理参加者の協力を受け行った。
- 4、調査及び資料整理は、同研究所の東 洋一・小倉万里子・清藤玲子・桜井みどり・鈴木久男・辻 裕司・前田義明・南出俊彦・百瀬正恒が参加した。遺物復元及びそれに関わる作業は、出水みゆき・児玉光世・卜田健司・多田清二・田中利津子・中村 敦・中村享子・村上 勉が行った。
- 5、本書中の写真は、遺構・遺物とも村井伸也が撮影し、整理には幸明綾子が参加した。
- 6、木製品の樹種同定は岡田文男が行った。
- 7、測量の基準点は、京都市遺跡測量基準点を使用し、調査地の基準点の設置は、辻 純一・宮原健吾が行った。本書で使用した方位、座標の数値は新平面直角座標系(VI)による。標高は東京湾平均海面高度(T・P)を使用した。
- 8、本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。
- 9、本文中の地図は、京都市の承認を得て京都市計画局発行の都市計画基本図「城南宮」(2500分の1)を一部修正して使用した。

本文目次

第136次調査

1 調査経過	1頁
2 遺構	1頁
3 遺物	6頁
4 まとめ	12頁

図版目次

図版1 遺跡 第136次調査	調査位置図
図版2 遺跡 第136次調査	1 第1遺構面全景(西から) 2 第2遺構面全景(西から)
図版3 遺跡 第136次調査	1 第3遺構面全景(西から) 2 溝11検出状況(西から) 3 柱穴49・50検出状況(南西から)
図版4 遺物 第136次調査	出土土器
図版5 遺物 第136次調査	出土土器
図版6 遺物 第136次調査	軒丸瓦(1)
図版7 遺物 第136次調査	軒丸瓦(2)
図版8 遺物 第136次調査	軒平瓦(1)
図版9 遺物 第136次調査	軒平瓦(2)
図版10 遺物 第136次調査	出土木製品
図版11 遺物 第136次調査	軒丸瓦拓影・実測図
図版12 遺物 第136次調査	軒平瓦拓影・実測図

挿図目次

図1 北壁断面図	2頁
図2 第1遺構面実測図	3頁
図3 柱穴49・50・51断面図	4頁
図4 第2・3遺構面実測図	5頁
図5 出土土器実測図	7頁
図6 出土ヘラ記号瓦拓影	11頁
図7 溝11出土木製品実測図	11頁

第136次調査

1 調査経過

調査地は、京都市伏見区竹田内畑町56-4・62-1・63-2に所在し、鳥羽離宮跡東殿の北西部にあたる。この地域では区画整理事業による数次に渡る発掘調査や、平成元年度の第130次調査などにより、平安時代から中世にかけての遺構が多数検出されている。この地に店舗付き住宅の建設が計画されたため、工事に先立って試掘調査を実施した。その結果鎌倉時代から江戸時代の遺構が検出された。このため京都市埋蔵文化財センターと、原因者が発掘調査を実施することについて協議し、改めて発掘調査を実施することになった。

調査は現代盛土層、旧耕土層を重機により除去することから開始した。調査の結果、鎌倉時代から江戸時代までの井戸、溝、土塼、柱穴など多数の遺構を検出した。これらの写真撮影及び実測を行い、一部下層遺構の調査(断ち割り)等を実施して調査を終了した。

2 遺構

調査区の基本層序は現代盛土層、旧耕土層が約0.9m、旧耕土層下は黄灰色泥土層、暗褐色砂泥層、にぶい褐色砂泥層(第二層)、オリーブ黒色砂泥層、オリーブ黒色砂礫層などが堆積する。このうち、黄灰色泥土層からにぶい褐色砂泥層までの土層で次に示す各遺構を検出した。なお、オリーブ黒色砂礫層には磨滅した平安時代前期と考えられる須恵器片が包含されており、今回の調査区内では無遺物層(地山)は検出していない。

検出した遺構には、鎌倉時代から江戸時代までの井戸、溝、土塼、柱穴などがある。以下主要な遺構の概要について述べる。

井戸 1 調査区中央西側で検出した素掘の井戸である。井戸枠は漆喰製である。検出面での規模は東西約1.8m、南北約2.0m、深さ0.6mを測る。

土塼 5 調査区北壁に接して検出した土塼である。検出面での規模は東西1.0m、南北0.6m以上、深さ約0.4mを測る。埋土は上からオリーブ褐色砂泥層(炭混)、灰色泥土層、腐植土層などが堆積する。

溝 6 調査区西側で検出した南北方向の溝である。検出面での規模は幅2.0m以上(西側肩口は調査区外)、深さ約0.3mを測る。埋土はオリーブ黒色砂泥層が堆積する。

井戸7 調査区南西部で検出した素堀井戸である。平面形は円形を呈し、検出面での規模は直径約1.8m、深さ0.4mを測る。井戸枠は検出してない。

井戸10 井戸7の西側に近接する箇所検出した井戸である。平面形は楕円形を呈し、東西2.0m、南北2.4m、深さ0.9mを測る。この井戸についても井戸枠は検出してない。

溝11 調査区中央より北側で検出した東西方向を示す溝である。検出面での規模は、幅1.4m~1.9m、深さ0.3~0.5mを測る。埋土は大きくオリブ黒灰色泥土層、オリブ黒色砂泥層の2層に分層でき、埋土中からは木製品（漆器椀、下駄、曲物の底板、しゃもじなど）が多く出土している。

土壌53 調査区南半中央で検出した平面形が隅丸長方形を呈する土壌である。検出面での規模は東西1.2m、南北0.5m、深さ0.25mを測る。埋土は、灰色砂泥層（多量の瓦を含む）、オリブ黒色泥土層（炭、木片含む）、灰色泥土層の3層に分けられる。土壌内から、完形の土師器の皿と椀が出土した。出土状態が皿の上に椀を伏せていたことから、祭祀に関連する遺構と考える。

土壌57 調査区中央で検出した平面形が長方形を呈する土壌である。検出面での規模は東西1.4m、南北2.0m、深さ0.2mを測る。埋土は大きく褐色砂泥層、にぶい黄褐色泥土層

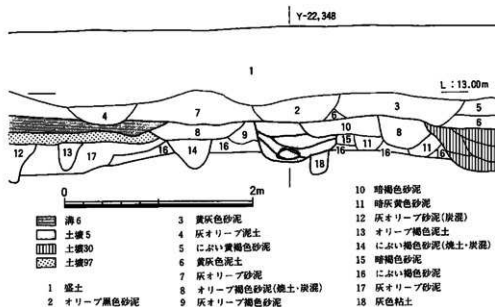


図1 北壁断面図

の2層に分けられる。

土壌59 調査区南東部で検出した土壌である。検出面での規模は東西1.0m、南北1.8m
深さ0.15mを測る。埋土は灰オリーブ砂泥層で、焼土・壁土等が包含されていた。

土壌85 調査区の北側で検出した土壌である。検出面での規模は東西0.5m、南北1.45
m、深さ0.2mを測る土壌である。埋土上層には土壌53と同じように瓦が詰まっていた。

土壌97 調査区北西隅で検出した土壌である。検出面での規模は東西1.8m、南北1.8m

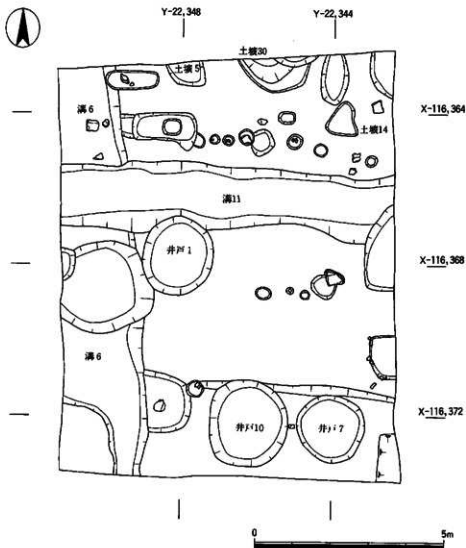


図2 第1遺構面実測図

以上、深さ0.1mを測る。埋土は暗オリーブ灰色泥土層で炭、焼土を含む。

土壌101 調査区中央部東壁側で検出した、平面形が楕円形を呈する土壌である。検出面での規模は、東西2.6m、南北3.0m以上、深さ0.1mを測る。埋土は小石混じりのオリーブ黒色砂泥層である。

次に、区画整理事業による現在の新堀川通りの道路敷設に伴う発掘調査や、平成元年度の第130次発掘調査などで多数検出されている柱穴群と同じく、柱穴(根石・礎板などを底部に据えるものもある)を多数検出した。しかし調査面積が狭いことや柱穴等の遺構の重複により、建物の規模など具体的な様相は明らかにできなかった。しかし個別的には遺存状態の良好なものもあり、一部柱穴の検出状況を述べておく。

柱穴41 調査区南東部で検出した、平面形が隅丸方形の柱穴で、検出面での規模は、長辺0.55m、短辺0.4m、深さ0.3mを測る。底面に板状を呈する砂岩が据え付けてある。柱穴内には、断面形が長辺0.28m、短辺0.2mの長方形を呈する柱根が遺存していた。

柱穴49・50・51 調査区中央東側で検出した平面形が隅丸方形の楕円形を有する柱穴である。検出面での規模は1辺0.5m～0.7m、深さ0.3～0.4mを測る。いずれも柱根(直径0.15m～0.2m)が残っていた。柱穴49の柱根はマツで加工痕はなく、むき身のままである。柱穴50・51の柱根は樹皮がついたままのもので、いずれもクリを使用していた。

柱穴111 溝11を完掘後、溝底面で検出した平面形が隅丸方形を呈する柱穴である。検出面での規模は、1辺約0.9m、深さ0.25mを測る。柱穴底部には長辺0.3m、短辺0.2m、厚さ5cmの長方形を呈する礎板(マツ)が据え付けてある。今回検出した柱穴の中で礎板を据え付けてある柱穴はこの1基だけである。

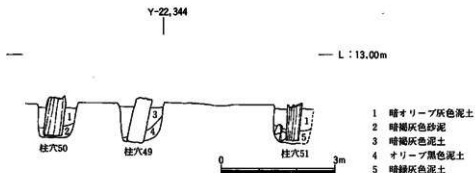


図3 柱穴49・50・51断面図

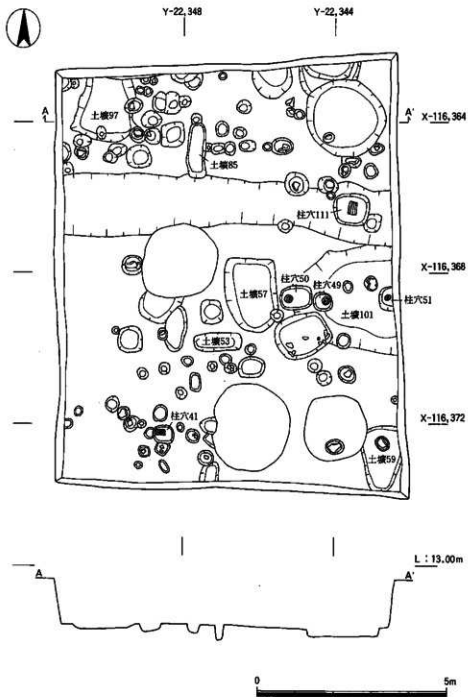


图4 第2·3道横面实测图

3 遺物

遺物は、遺物整理箱で総量35箱出土した。遺物内容は、平安時代から江戸時代までの土器類・瓦類・木製品・銭貨・金属製品のほか壁土などがある。このうち5箱が木製品等の木質遺物である。他は土器・瓦類であり、瓦類は30箱の内の大半を占める。

土器類 土師器・須恵器・瓦器・焼き締め陶器・国産施釉陶器・輸入陶磁器などがある。以下、土器類については遺構ごとにその概要を述べる。

井戸10出土土器 土師器・瓦器がある。瓦器碗(1)は小さな底部から体部は大きく外傾し、口縁部はやや角度を変えて立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。底部に低い高台を張り付ける。口縁部外面はナデ、体部はオサエを行う。内面は粗いへらミガキを施す。胎土は灰色を呈する。体部外面に重ね焼き痕がある。口径13.1cm、器高4.2cm。

土壇97出土土器 土師器・須恵器・瓦器・焼き締め陶器がある。土師器皿は大・小2種ある。小には(2)がある。口縁部は僅かに外反する。内面及び口縁部外面上半はナデ、他はオサエを行う。口径8.0cm、器高1.6cm。大には(3~5)がある。3は口縁部が外反し端部は丸くおさめる。4は口縁部が直線的に立ち上がり、端部は僅かに肥厚する。5は口縁部が僅かに屈曲しつつ立ち上がり、端部は上方につまむ。3~5の器面調整は内面及び口縁部外面上半はナデ、他はオサエを行う。口径10.0~11.2cm、器高2.0~2.2cm。

溝8出土土器 土師器・瓦器・焼き締め陶器・国産施釉陶器・輸入陶磁器がある。土師器皿は形態から2種ある。(6・7)は口縁部が短く立ち上がり、口縁端部は僅かに外方へつまむ。内面はナデ、外面はオサエを行う。口径6.5と6.9cm、器高1.6cm。(8)は口縁部がやや屈曲して立ち上がり、端部は丸くおさめる。内面及び口縁部外面上半はナデ、他はオサエを行う。口径11.3cm、器高2.0cm。

土壇101出土土器 土師器・須恵器・瓦器・焼き締め陶器・輸入陶磁器がある。土師器皿(9)は口縁部が緩やかに屈曲して立ち上がり、端部は上方につまみ丸くおさめる。内面及び口縁部外面上半はナデ、他はオサエを行う。口径18.3cm。国産施釉陶器碗(10)は小さめの底部から体部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部内面に凹線が1条巡る。高台は削り出す。胎土は灰色で緻密、体部中位まで茶褐色の釉が掛かる。口径11.2cm、器高6.2cm。

土壇53出土土器 土師器・須恵器・焼き締め陶器がある。土師器には皿・碗などがある。皿(11)は口縁部が直線的に大きく外傾し、口縁端部は器壁が厚い。内面及び口縁部外面上半はナデ、他はオサエを行う。口径14.2cm、器高2.2cm。碗(12)は体部が内湾気味に立ち上

がり、口縁部は僅かに開く。口縁端部は丸くおさめる。底部にはやや高い高台を貼り付ける。内面及び口縁部外面上端はナデ、他はオサエを行う。口径8.6cm、器高4.5cm。

土壇5出土土器 土師器・瓦器・国産施釉陶器・輸入陶磁器がある。土師器皿は形態により3種ある。(13)は口縁部が短く立ち上がる。器面調整は7と同様である。口径5.4cm、器高1.2cm。(14)は底部中央が膨らみ口縁部は外反して端部は肥厚する。内面及び口縁部外面上半はナデ、他はオサエを行う。口径6.8cm、器高2.0cm。(15)は形態・手法とも11と同様であるが、底部と口縁部の境に浅い凹線が走る。口径13.8cm、器高2.4cm。国産施釉陶器皿(16)は口縁部は緩やかに立ち上がり、端部は外反する。高台は削り出す。口縁部上端は波状を呈する。胎土は灰色を呈し硬い。体部中位まで色の釉を掛ける。内面にトチン痕がある。口径10.7cm、器高3.6cm。

溝11出土土器 土師器・瓦器・焼き締め陶器・国産施釉陶器がある。土師器では皿・壺がある。皿は形態から3種ある。(17)は形態・手法とも13とほぼ同様であるが、口縁端部

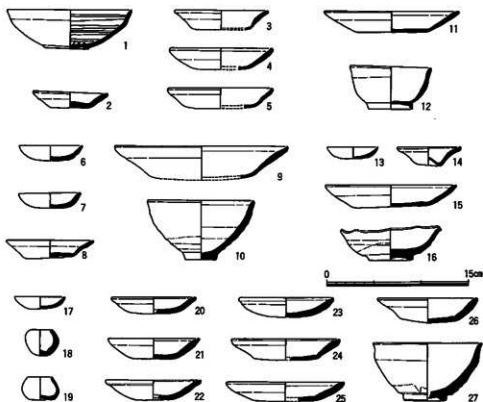


図5 出土土器実測図

は丸くおさめる。口径5.2cm、器高1.3cm。(18~21)は口縁部が緩やかに立ち上がり、端部は20が丸くおさめ、他は上方に僅かにつまむ。口径9.0~10.1cm、器高1.8~2.2cm。21は灯明皿として利用する。(22~24)は口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は22が僅かにつまみ、他は丸くおさめる。内面の底部と口縁部の境にやや強い凹線を1条巡らす。口径10.7~12.4cm、器高2.1~2.6cm。壺は形態から2種ある。(25)は体部がほぼ球形を呈し、口縁部は丸くおさめる。(26)は胴部最大径が体部下半にあり、口縁部は内側に折れる。器面調整は内面がナデ、外面はオサエを行う。口径2.2と2.3cm、器高2.8と2.2cm。

国産施釉陶器類(27)は体部がやや内湾しつつ立ち上がり、口縁部は角度を変え立ち上がる。端部は僅かに外反する。高台は削り出す。体部下半は回転ヘラケズリ、他はヨコナデを行う。胎土は灰色で硬く、体部下半まで色の釉を掛ける。口径11.5cm、器高6.1cm。

瓦類 出土した瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。このうち軒丸瓦は23点、軒平瓦は17点出土しているが、ここでは遺存状態の良い軒丸瓦13点、軒平瓦10点についての概要を述べる。

蓮華文軒丸瓦(1・2・3・4・5・6)

1は、文様は非常に浅く単弁6弁の蓮華文。子葉、花卉は細い線で表現し複線になっている。花卉の外側を線でつなぎ界線としている。中房はオサエられ不明、外縁の深さは非常に浅い。瓦当厚は薄く横長の楕円形を呈し、横の瓦当径が筈よりはみ出す。瓦当裏面はケズリ後オサエ、裏面下端部、外周下部はケズリで調整する。胎土は黒色を呈し砂粒を含む。焼成は良好、硬質。土壌85出土。

2は、界線で囲まれた内区に単弁が連続してめぐる。中房は不明、外縁は浅く、文様も浅い。瓦当裏面下端部、外周下部はケズリで調整する。胎土は砂粒を含む茶灰色を呈し、焼成は良好。土壌85出土。

3は、小片のため詳細は不明。花卉は逆U字形で表現し、子葉を囲む花卉は連なると考えられる。瓦当厚は薄い。胎土は灰白色を呈し、焼成は良好でやや軟質。土壌85出土。

4は、梯子形に近い花卉で子葉は盛り上がる。棒状の間弁が付き、外区に1条の界線がめぐる。中房は少し窪み蓮子を有する。花卉に対応し割付に使用したと考える突起が外縁の内側にある。胎土は灰褐色を呈し、砂粒を少し含む。焼成は良好で硬質。井戸1出土。

5は、小片のため詳細は不明であるが、凸線で囲まれた花卉の中に幾何学模様配されていると考えられる。瓦当裏面下端部と外周下部はケズリで調整する。胎土は灰褐色で砂粒、小石を含む。焼成は良好で硬質。土壌101出土。

6は、界線で囲まれた中房に1+4の蓮子を配する。花卉は簡略化され、内区線を区切っただけで8弁ある。瓦当厚は分厚く、外周はナデで調整する。胎土は砂粒、小石を含む青灰色を呈し、焼成は良好で硬質。土壌57出土。

三巴文軒丸瓦(7・8・9・10・11・12・13)

7は、右巻三巴文で尾部は半周し、次の巴に接し界線風になる。巴頭部は離れ、巴の断面は台形を呈す。瓦当は横の径が長く楕円形で、瓦当范より外縁ははみ出す。瓦当の中心に文様割付の小さな突起がある。裏面には指圧痕が顕著に残る。外周はヨコ方向のケズリで調整する。胎土は灰白色で砂粒、小石を含み、焼成は良好。土壌85出土。

8は、(7)同様に尾は次の巴に接し界線風になる。瓦当は楕円形で珠文帯は無し、巴頭の断面は台形で一箇所は大きく盛り上がっている。瓦当裏面に指オサエ圧痕が明瞭に残り、下端部外周はケズリで調整している。瓦当面は黒色、胎土は黒褐色で細砂粒を含む。焼成は良好で硬質である。土壌85出土。

9は、巴頭部の先端が突がり互いに近接し、尾は半周する。瓦当面に木目痕が残り、記号あるいは范傷のようなものがある。裏面は指オサエ、外周は丁寧なナデで調整している。胎土は灰色を呈し砂粒、小石を含み、焼成は良好である。第二層下出土。

10は、右巻の巴尾が半分以上巻き込む。二重の短い界線がめぐり外縁の詳細は不明であるが残存部では極めて狭い。瓦当下端部の断面は三日月形を呈する。瓦当裏面は指オサエ後ナデで調整している。胎土は砂粒、小石を含み、焼成は良好である。鳥羽離宮跡第112次・¹¹⁻¹134次調査出土瓦と同范か。第二層下出土。

11は、大粒の珠文を密に配し、左巻の三巴は高く盛り上がる。巴断面は丸みを帯び、巴尾は短い。外縁はほぼ垂直に立ち上がる。胎土は灰色を呈し、砂粒を含む。焼成は良好で硬質である。瓦当面に釉がかかる。溝6出土。

12は、大粒の楕円形の珠文が密にめぐり、太めで高く盛り上がる界線をもつ。珠文の廻りに范傷が多い。巴の数は不明だが三巴か。瓦当外周は軽くケズリで調整、瓦当裏面には指オサエ圧痕が残る。瓦当面は黒灰色、胎土は青灰色を呈し、砂粒、小石を多く含む。焼成は良好で硬質である。土壌101出土。

13は、(12)より小粒の珠文が密にめぐり、少し盛り上がる界線を持つ。巴は偏平で范ズレがめだつ。瓦当裏面と外周はナデ調整。瓦当裏面の外周に沿って溝を掘り、ナデした後丸瓦部を接合している。胎土は青灰色で砂粒を含む。焼成は良好、硬質。第2層下出土。なお、図版7の(14)は軒丸瓦7と同范、(15)は軒丸瓦9と同范である。

唐草文軒平瓦 (16・17・18・19)

16は、唐草は大きく3転し、枝葉が多く派生する。瓦当面に木目の范傷が明瞭に残る。瓦当は包み込み式で、外周と裏面をナデ調整する。胎土は青灰色を呈し、砂粒と小石を含む。土壌6出土。

17は、外区外縁に珠文を巡らし、内区の唐草文の巻き込みは強い。瓦当部は接合式で、顎はヘラケズリを施した段顎である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

18は、小片のため詳細は不明であるが、瓦当上下端部はケズリで調整する。平瓦部凹凸面は、オサエの後ナデで調整する。胎土は褐灰色を呈し、砂粒を含む。第2層下出土。

19も、同様に小片のため詳細は不明であるが、顎下端部はケズリで調整する。瓦当面に范傷が残る。胎土は灰白色で砂粒を含む。焼成は良好である。柱穴100出土。

宝相華文軒平瓦 (20)

小片のため詳細は不明であるが、中心に宝相華を置き、左右に半截花文を上下対に配する。瓦当上下端部はケズリ、平瓦部凹凸面はオサエで調整する。胎土は灰褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は良好でやや硬質である。第2層出土。

刺頭文軒平瓦 (21)

刺頭の先端は丸みを帯び、刺頭を10個並べる。左から1つ目と2つ目、右から1つ目の刺頭文は、しのぎを省略、瓦当外周と上端面に段差がつき、段差の後ろの平瓦凹面に布目が残る。顎下端部はケズリ、裏面はヨコ方向のナデで調整する。胎土は灰白色を呈し、砂粒、小石を含む。焼成は良好であるがやや軟質である。第2層下出土。

雁巴文軒平瓦 (22・23・24)

22・23・24は、中央に左巻きの三巴文を配し、両側に雁文を置く。雁文は、右側が「∨」、左側は「∧」と逆転する。右端の巴は二巴の左巻き込み、左は三巴の左巻き込みである。22は、瓦当上端に、半折り曲げ造り特有のケズリ段差がつく。顎下端部はヨコ方向のケズリで調整、平瓦部凹面に布目が残る。凸面左端に「\」のヘラ記号(図6-22)がある。胎土は灰白色で砂粒を多く含む。焼成は良好でやや硬質である。23は、瓦当先端に布目残り平瓦凹面の布目も粗い。顎下端部と側面はケズリ、平瓦凸面はオサエとナデで調整する。胎土は淡黒灰色を呈し、砂粒を含む。焼成は良好で硬質である。24は、瓦当上端を横方向にケズリで調整、平瓦部凹面に布目が残る。凸面は丁寧なオサエ、顎下端部はケズリで調整する。凸面左側に「|」のヘラ記号(図6-24)がある。胎土は淡黒灰色を呈し、砂粒、小石を含む。焼成は良好で硬質。22・23・24は同范で、いずれも土壌85出土。

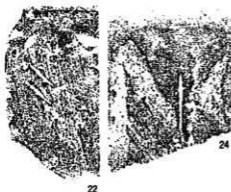


図6 出土ヘラ記号瓦拓影

巴文軒平瓦 (25)

中心に「卍」状の中心飾りを置き、基本的には左右に2個ずつ右に巻き込む三巴文を配するが、左端の巴の1線だけが左に巻き込んでいる。外縁は瓦当范よりも広い。平瓦部凹面には布目が残る。凸面は丁寧なおサエ、顎下端部はケズリで調整する。胎土は黒灰色を呈し、砂粒を含み、焼成は硬質。瓦当部は折り曲げ造りである。井戸7下層出土。醍醐稻杜遺跡出土瓦と同范と考えられる。

木製品 溝11から主に出土した。漆器椀・曲物・箸・しゃもじ・下駄などがあるが、図に示した漆器椀及びしゃもじを除けば遺存状態は極めて悪い。

漆器椀(図7)は2個体出土している。(1)は口縁端部が一部欠損するもののほぼ完形に

近い。体部は内湾しつつ立ち上がる。高台は輪高台状を呈する。口径11.6cm、復元器高5.6cm、高台径6.0cm、高台の高さ0.6cmを測る。口縁端部の一部は焦げて炭化している。椀の内面は赤色漆、外面は黒色漆の上に赤色漆で竹あるいは笹の葉と考えられる絵付けがしてある。(2)は、口縁部が欠損している。体部は内湾しつつ上方ではほぼ垂直に立ち上がる。高台は輪高台状を

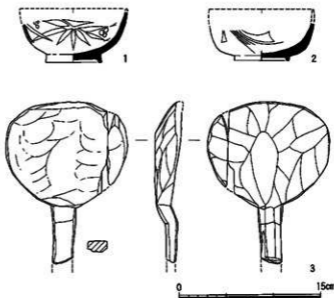


図7 溝11出土木製品実測図

呈する。現存器高3.8cm、高台径6.0cmを測る。椀の内面は赤色漆、外面は黒色漆の上に白銀色で、水引と考えられる絵付けがしてある。樹種はトチの木である。

しゃもじ(3) 把手部の一部が欠損しているが現存長は17.0cmを測る。皿部の形状は団

扇状を呈し、最大幅は13.0cm、深さ1.8cmを測る。皿部の外縁は器底部より分厚く調整している。皿部内の切り込み及び外面、把手部とも工具によりやや粗い成形を行っている。樹種はカエデ属の一種であると考えられる。

銭貨 銭貨は土壌14から「祥符元寶」・「皇宋通寶」の北宋銭が2枚出土している。

金属製品 溝11からキセルが出土した。真鍮製の火皿と吸口が各1点ずつある。火皿には竹製の羅字の一部が遺存している。火皿は長さ7.0cm、最大径1.1cm。吸口は長さ7.2cm、最大径0.8cm。その他、上層からもキセルの火皿が1点出土している。溝6からは、鉄釘が1点出土した。頂部は折り曲げている。断面は1辺0.3cmの方形を呈する。長さ5.0cm。

4 ま と め

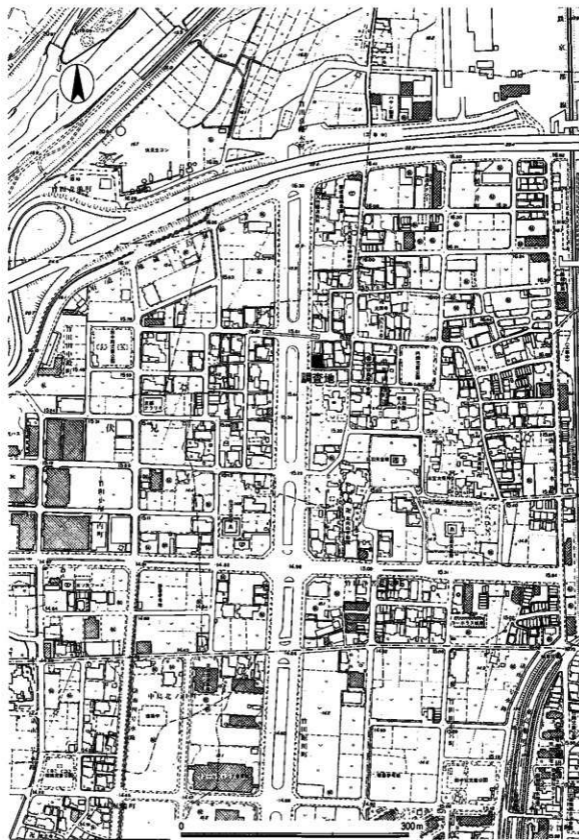
今回の発掘調査では、鳥羽離宮跡に直接関係すると考えられる遺構は検出できなかった。しかし、中世の各遺構からは多数の平安時代後期の瓦類が出土しており、この瓦類の分布状況は、周辺地域に鳥羽離宮期の建物跡などの存在の可能性が高いことを示している、今後の調査の成果を待ちたい。

各遺構に目を移すと、今回の調査では中世から近世にかけての遺構を多数検出した訳であるが、例えば日常生活に不可欠な井戸、あるいは建物に想定できる数多くの柱穴を検出したにもかかわらず、狭小な調査面積や遺構の重複状況から、調査区内においては建物の規模、配置等は明確に把握することはできなかった。一方、調査区中央部と西側で検出した東西方向の溝（溝11）と南北方向の溝（溝6）は重複関係にあるが、出土遺物などからは、かなり近接した時期に成立していたと考えられる。この遺構については何らかの区画を想定させるものである。土壌53、85については遺物の出土状態及び土器の器形などを考慮すると祭祀に利用されたか（検出地において）、その後一括放棄された遺構と考えられる。以上今回の調査成果については、遺構の項で述べてきたような遺構群が検出できたことにより、当該地は鳥羽離宮が廃絶した後も現在に至るまで、ここ伏見区竹田では人々の営みが続けられてきたことを物語るものであり重要な成果であった。

註

- (1) 京都市文化観光局「昭和60年度 鳥羽離宮跡発掘調査概報」1986年
- (2) 京都市文化観光局「平成元年度 鳥羽離宮跡発掘調査概報」1989年
- (3) 鳥羽離宮跡調査研究所「柵柱遺跡調査概報」1975年

圖 版



調査地位置図



1 第1遺構面全景 (西から)



2 第2遺構面全景 (西から)



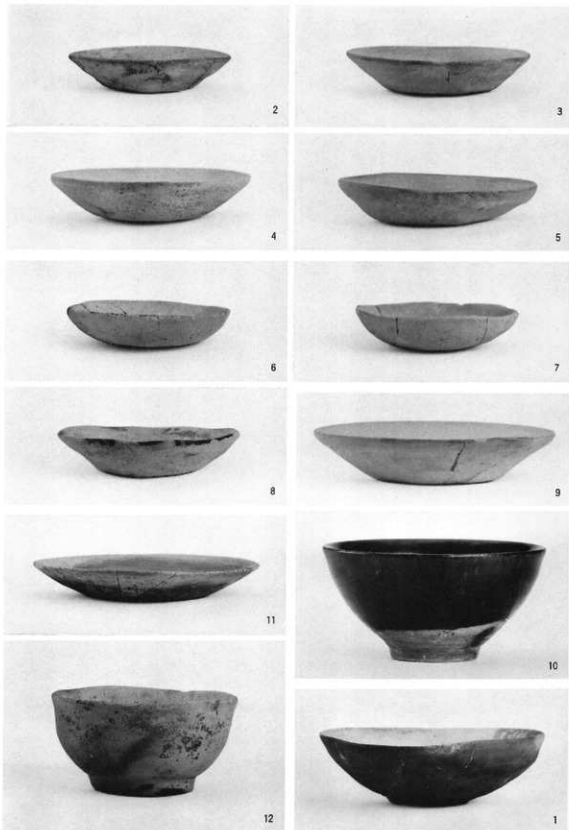
1 第3遺構面全景 (西から)



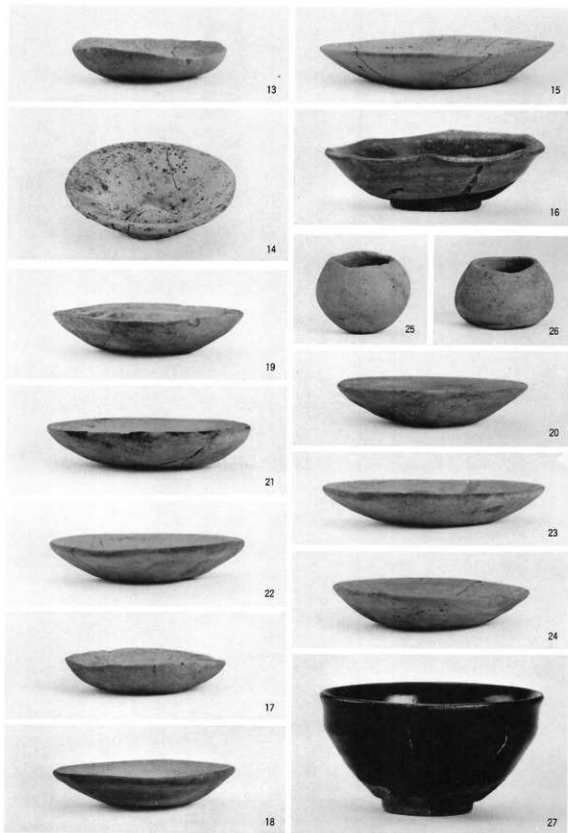
2 溝11検出状況 (西から)



3 柱穴49・50検出状況 (南面から)



井戸10 出土土器(1)・土壙97 出土土器(2~5)・溝6 出土土器(6~8)・土壙101 出土土器(9,10)
土壙53 出土土器(11, 12)



土坑5 出土土器(13~16)・溝11 出土土器(17~27)



1



2



6



5



3



4



15



9



7



14



8



10



11



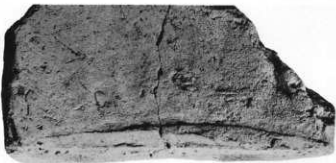
13



12



21



22



23



16



18



17



19



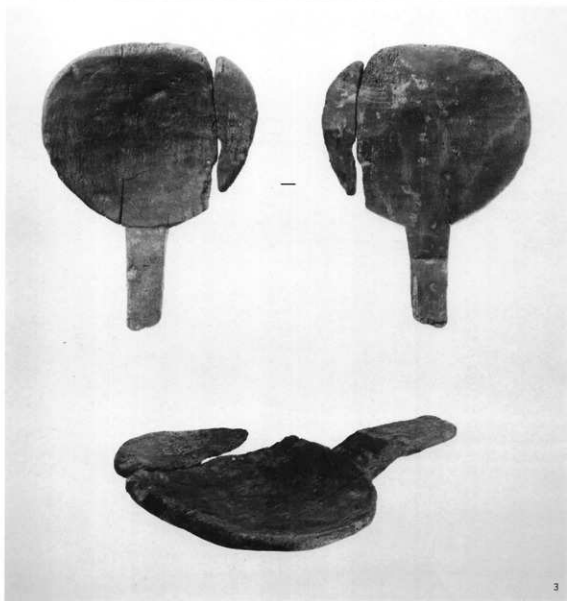
20



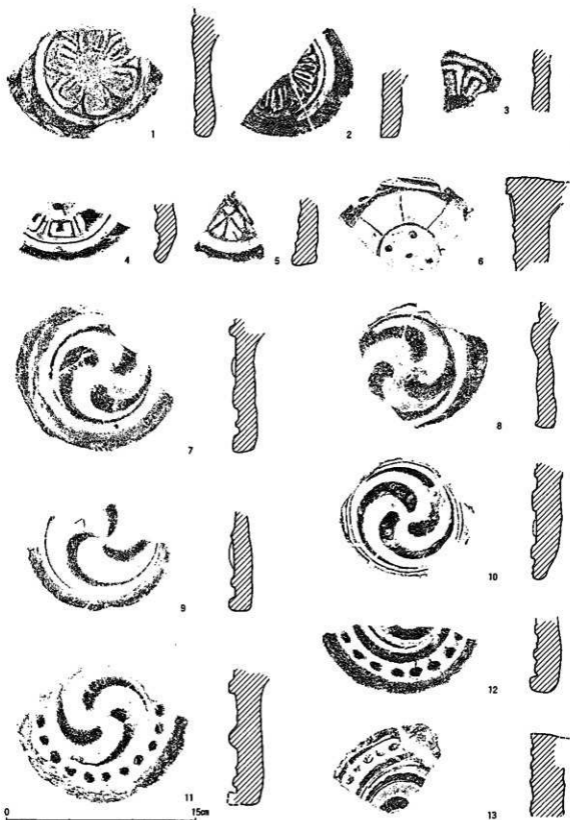
24



25



溝11 出土木製品 漆器碗(1. 2), しゃもじ(3)



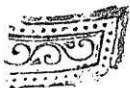
軒丸瓦拓影・実測図



16



18



17



19



21



22



23



24



25



20



鳥羽離宮跡発掘調査概報

平成2年度

発行日 平成3年3月30日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎登勝寺町13 京都会馆内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入る元伊佐町256-1
TEL (075) 415-0521

印刷 真陽社